

ハチ公のエピソード

東京帝国大学農学部に勤めていた上野英三郎氏は秋田犬の子犬を飼いたいと前々から思っていました。そこで1924年1月14日、大館駅から上野駅へ遙々やってきたのがハチです。このときハチは米俵に入れられていました。

ハチはとても人懐っこい性格で、上野氏にもよく懐いていたようです。

しかしその翌年の1925年に上野氏が急死してしまいます。その後は上野氏の妻である八重さんの親せきの、日本橋伝馬町の呉服屋に預けられます。しかしハチは人懐っこすぎて客に飛びついてしまうため浅草にあった高橋千吉氏宅へ移されます。ここでも散歩中に急に渋谷に爆走してしまうなどして高橋氏と近所の住民とでもめごとになります。すると次は渋谷にあった上野市宅へ行くことになります。するとハチは喜びすぎてしまい、近所の畑で走り回り作物をだめにしてしまいます。そこで1927年秋、渋谷の隣にある、豊多摩郡代々幡町大字代々木字富ヶ谷に住んでいた植木職人、小林菊三郎氏のもとへ預けられます。小林氏は上野氏の家でも仕事をしており、ハチを幼少時から知っていた人でした。このころハチは渋谷によく出没するようになります。渋谷駅を訪れる際には道中にあった旧上野宅の窓を覗いていたそうです。

渋谷駅に頻繁に現れるようになると、よろしくないことですが、ハチに虐待や悪戯をする人がいたようです。そのことを知った日本犬保存会初代会長、斎藤弘吉氏がハチを哀れみ、新聞に寄稿したことでハチは全国的に有名になりました。

1934年にはハチ公の銅像が渋谷駅に作られ、除幕式にハチも参加しています。

その一年後の1935年3月8日午前六時過ぎ、渋谷川に架かる稲荷橋付近の滝沢酒店北側路地の入口でハチが死んでいるのが見つかりました。この場所はハチがふだん行く場所には入っていなかったそうです。

その後のハチの解剖では、心臓と肝臓に大量のフィラリアが見つかり、腹水が貯留していました。死因はフィラリアと癌であると判断されました。また、ハチの胃には焼き鳥の串が3～4本見つかりました。

ここからは溝口さんの話していた、ハチ裏話です。上野英三郎氏は相当な酒飲みだったそうです。渋谷にハチを連れて飲みについてはハチを放置していました。それを哀れに思った焼き鳥屋のおやじが焼き鳥をあげていたそうです。さらに、ハチが上野氏の死後も渋谷で上野氏を待っていたといわれていますが、実は焼き鳥をもらいにいたただけではないかとも考えられています。